

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第68号

平成21年 1・2・3月



重要文化財 火焰宝珠形舍利容器 奈良・海龍王寺（平常展「仏教美術の名品」より）

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術
～1月18日(日)

東新館

お水取り

2月7日(土)～3月15日(日)

東新館

特集展示

とてもよく似た
二つの仏像

—金峯山寺の釈迦如来像と
兵庫県所蔵の天部像—

1月14日(水)～5月17日(日)

本館 第1室

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 ～3月15日(日)

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

～1月18日(日) 東新館



春日若宮田楽図〈月次風俗図扇面のうち〉 東京・出光美術館

冬の奈良の風物詩・春日若宮おん祭は、保延二年（一一三六）にはじまったとされ、昨年十二月十七日に八百七十三回目が行われました。

この展覧会は、おん祭の行われる季節に合わせ、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端を紹介する企画で、今回は特に田楽に焦点を当てて構成しています。また、おん祭を支えた春日信仰にまつわる品々を併せて展示しており、春日信仰の広がりや多様性が見渡せる内容となっています。

今も昔も盛儀を誇る南都の一大祭礼絵巻を、展示室でもじっくりとお楽しみ下さい。

特別陳列

お水取り

2月7日(土)～3月15日(日) 東新館



二月堂縁起断簡 東大寺



紺紙銀字華嚴經〈二月堂焼経〉 奈良国立博物館



◎二月堂本尊光背 東大寺



二月堂曼荼羅 東大寺

奈良に春を呼ぶとされる東大寺二月堂の「お水取り」。正しくは修二会といひ、十一面観音に過ちを懺悔して除災招福を祈る、悔過という儀式が行われます。お水取りでは、二月二十日から月末までの前行（別火）、三月一日から十五日までの本行を合わせ、約二箇月間にわたり様々な儀礼が行われます。本展覧会はその期間にあわせて開催される恒例の企画で、実際に用いられた法具、歴史と伝統を伝える絵画・文書などがご覧いただけます。

「お水取り」は東大寺の実忠和尚が天平勝宝四年（七五二）に創始した十一面観音悔過の行法に始まるとされます。それ以来、不退の行法として千二百五十年もの間、幾度かの危機を乗り越えながら、様々な人々によつて支えられ、長い歴史を刻んできました。

寛文七年（一六六七）の行中、二月堂内陣からの出火により二月堂は焼け落ちます。その焼け跡からは「紺紙銀字華嚴經（二月堂焼経）」や焼損した「二月堂本尊光背」が発見されました。しかし東大寺の願いにより、すぐさま江戸幕府から支援がなされ、幕府お抱えの大工らが中心となつて、寛文九年（一六六九）に二月堂は再建されます。今年には再建後三百年にあたり、初出陣となる「二月堂指図」や「年中行事記録」など、この再建の様子を知る上で貴重な史料が展示されます。

観覧後お水取りへ参ると、目にする景観にいつそう歴史の深みを感じていただけるでしょう。

特集展示

とてもよく似た二つの仏像

— 金峯山寺の釈迦如来像と
兵庫県所蔵の天部像 —

1月14日(水)～5月17日(日)
本館(第1室)



釈迦如来坐像 奈良・金峯山寺 像高 83.2 cm (上)
天部立像 兵庫県 像高 169.5 cm (左)

木造 彩色(現状素地) 平安時代(9世紀)

昨年(平成二十年)の九月末から本館に展示中の兵庫県所蔵の天部立像は、当館文化財保存修理所で保存修理が行われたものです。修理は、足元(像底)の朽損部に合成樹脂を含浸させて材質を強化し、像それ自身を自立可能にすることでした。ところで着工後、この天部立像が奈良・金峯山寺所蔵の釈迦如来像(妙法殿所在)に非常によく似ていることが話題に上りました。たとえば目鼻立ちが双子の顔のように酷似しており、同一作家の手になるかと思われるほどに造形感覚が一致しています。また金峯山寺像の像底には、制作過程の段階で描かれた足を組んだ墨画が見られますが、この天部像のそれにも足裏などの輪郭線が墨描されています。これらの点からみても、両像が同一環境のもとで造られ、かつ近接する場に安置されたか、という推論が成り立つのではないかと思います。そこで、これら二つの木彫像が隣同士に並ぶ場を設けて、両像の類似点についてより深く考えてみたいと思います。この機会に平安初期一木彫の魅力を存分に鑑賞していただけたら幸いです。

鈴木喜博(上席研究員)

特別展 予告

国宝 鑑真和上展

4月4日(土)～5月24日(日)
東西新館



●鑑真和上坐像 唐招提寺

鑑真和上は、天平勝宝五年(七五三)に唐から来日しました。最初に渡日を志してから約十二年、その間、五度にわたる渡航の失敗を経験し、さまざまな危険にも遭遇しました。それでも、幾多の苦難に屈せず仏教伝道のため来日を目指した鑑真の強い意思は、現代の我々にも深い感銘を与えます。本展では、在りし日の和上の姿を鮮明に伝える肖像彫刻の名品鑑真和上像や、和上の出家から渡日・遷化までを描いた東征伝絵巻を展示し、その偉業を讃えます。また、今年はこの三十年にわたっておこなわれてきた唐招提寺金堂(国宝・奈良時代)の解体修理が完成します。本展では、これを記念し、唐招提寺の千二百余年の歴史と、その伽藍を守ってきた人々の足跡もあわせて紹介いたします。

役行者の孔雀明王像

谷口 耕生（当館研究員）



(1) 絹本着色孔雀明王像 法隆寺

昨秋、石川県立美術館において特別展「法隆寺の名宝と聖徳太子の文化財」が開催され、国宝三点・重要文化財五十三点を含む百件以上の宝物が法隆寺から出陳された。奈良国立博物館は学術協力の形で企画段階から関わり、私も宝物の点検・展示等の作業に立ち会う機会を得た。

展示会場を見渡して改めて感じたのは、古代から中世・近世と各時代にわたる文化財が、これほどの高い質と量をもつて寺院に伝えられたことに対する驚きだった。それは法隆寺が、聖徳太子信仰を中心として、様々な信仰に支えられながら悠久の歴史を刻んできた結果なのだろう。特に仏教絵画の質の高さは目を見張るものがあり、一般にはあまり知られていない中世における法隆寺の信仰の姿を物語る品々も少なからず含まれていた。

中でもひととき私の心をとらえたのが、絹本着色孔雀明王像



(2) 絹本着色當麻曼荼羅縁起(部分) 當麻寺



(3) 同上

（重要文化財 挿図1）だった。翼を大きく広げた孔雀の背に坐る明王の姿を描いたもので、肉身に朱の隈取りを施したエキゾチックなその姿は、見るものにひととき強い印象を与える。さらにこの絵で特徴的なのは、一般の孔雀明王像が正面向きであるのに対し、明王も孔雀も向かつて左斜めを向いていることだ。こうした特色ある孔雀明王像については、これまで他の作例が全く紹介されてこなかった。

ところが最近、奈良国立博物館に寄託されている奈良・當麻寺所蔵の絹本着色當麻曼荼羅縁起（重要文化財）を詳しく見る機会があり、たまたまその一場面に法隆寺本とよく似た孔雀明王像の画像が描かれているのを見出すことができたので、ここに紹介したい。その場面（挿図2）は、當麻寺が建つ二上山東麓の地がもとと修験道の開祖・役行者の土地で、長年にわたって孔雀明王の秘法を行っていたことを伝えるものである。役行者が孔雀経法を行ったことは、呪術的能力に優れた山林修行者であることを象徴する事績として、後世の縁起類や説話集でたびたび語られてきた。

画面は、山中の小堂内に役行者の姿を描いており、堂内には孔雀経法の修法壇の様子が見えている。そして、まさにそこに描かれる孔雀明王像（挿図3）こそが、法隆寺本に極めてよく似た姿で表されているのである。孔雀明王の肉身に朱の隈取りが施

されている点、明王も孔雀も向かつて左斜めを向いている点は、他に例がないとされた法隆寺本の特色をよく踏襲している。當麻曼荼羅縁起は法隆寺本と同じ鎌倉時代、十三世紀後半に描かれたと考えられ、同じ南都に伝来しているなど共通点が多いことから、両者に描かれる孔雀明王像の図像がほぼ一致するのをただの偶然として見過ごすわけにはいかないだろう。

そこで注目したいのが、法隆寺という寺院が中世において修験道の重要な拠点となっていたという事実だ。中世の法隆寺は興福寺の強い影響下にあつて、興福寺が統括していた大峰山修験の先達寺院として多くの修験者が往来していた。そして當麻寺も、葛城修験の重要な聖地である二上山を背後にひかえ、南都における修験道の一大拠点となっていたのである。こうした地理的にも近い法隆寺と當麻寺については、近年の研究によつて、修験道を通じた密接な往来があつた実態が明らかになりつつある。

こうした事実を踏まえるとき、法隆寺と當麻寺に極めてよく似た孔雀明王の図像が継承された背景に、南都の修験道系寺院を中心とひろまった、役行者が行ったとされる孔雀経法に対する信仰があつたとは考えられないだろうか。つまり法隆寺本の特色ある姿は、「役行者の孔雀明王」として権威付けられたものだったと想像してみたいのである。

飛鳥文化の殿堂というイメージが圧倒的に強い法隆寺に、このような修験道との関わりをうかがわせる宝物が伝わっているという事実は、意外に思われる方も多いだろう。今後とも、このような奈良の寺社が生み出した豊かな信仰に新たな光を当てようような展示を心がけていきたい。



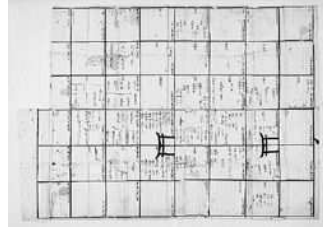
●透彫舍利容器(西大寺)



装飾付器台付子持須恵器(当館)



●紺紙金字一字宝塔法華經 卷第三(当館)



●大和国乙木莊条里坪付図(当館)



●六道絵(人道不浄相)(聖衆來迎寺)

平常展

仏教美術の名品

〈絵画・書跡・考古・工芸〉

1月6日(火)～3月15日(日)

西新館

(1月4日までは、たより67号を、ご覧下さい)

注目の逸品

1月6日～2月8日

【絵画】無量光菩薩像・金剛舞菩薩像(金胎仏画帖断簡)

【書跡】○大般若経(七寺一切経のうち)(七寺)

【工芸】○一切経唐櫃(中蓋・内箱とも)(七寺)

【考古】白磁・青白磁の合子・小壺(愛媛県石手寺経塚出土ほか)(当館)

2月10日～3月15日

【絵画】○大道和尚像、十六羅漢像(以上、当館)

【書跡】○日本書紀卷第十(残巻)、●金剛般若経開題(以上、当館)

【工芸】唐櫃、和櫃(以上、高山寺)

【考古】土偶片・縄文土器(青森・岩手県出土)(当館)

絵画

1月6日(火)～2月8日(日)

○釈迦三尊像(仁王会本尊)(西大寺)、○普賢菩薩像(当館)、○十一面観音像(太山寺)、○地藏菩薩像、○五大明王像(以上、当館)、○愛染明王像(宝山寺、大威徳明王像、○二河白道図(以上、当館)、○閻魔王図(長泉寺)、○六道絵(等活地獄)(聖衆來迎寺)、○阿弥陀三尊及童子像(法華寺)、○阿弥陀八大菩薩像(松尾寺)、○阿弥陀聖衆來迎図(退雲弥陀)(西教寺)、当麻曼荼羅(当館)、○真言八祖像(一行・空海)(神護寺)、○香象大師像(東大寺)、○善導大師像(知恩寺)、○興正菩薩像(新大仏寺)、○忍性菩薩像(大福田寺)

2月10日(火)～3月15日(日)

○釈迦三尊像、○釈迦靈鷲山説法図(以上、当館)、○釈迦八相図(大福田寺)、○八相涅槃図(觀音寺)

槃図(觀音寺)、○仏涅槃図(達磨寺)、○仏涅槃図(浄土寺)、○仏涅槃図(奈良・正暦寺)、○仏涅槃図(京都・正暦寺)、○千手観音像・観音菩薩立像、不空絹索観音像、○不動明王八大童子像(以上、当館)、○不動明王三童子像(瑠璃寺)、○十二天像(梵天・帝釈天(聖衆來迎寺)、○辟邪給・毘沙門天(当館)、○六道絵(人道不浄相)(聖衆來迎寺)、○地獄草紙(当館)、○九品來迎図(上品中・下生(瀧上寺、阿弥陀來迎図(当館)

【書跡】

1月6日(火)～2月8日(日)

○大般若経卷第二百四十六(長屋王願経)(瑞光寺)、華嚴経卷第十六(尼真證願経)、藍紙華嚴経卷第五(泉福寺経)、法華経卷第一(嵯峨下絵料紙)、大般若経(藤井莊春日社経、鬼問目連経(神護寺経)、版本大般若経卷第三百六十五(大威徳陀羅尼経卷第八(法隆寺一切経、○青蓮院寺領目錄門葉記)、○大和国乙木莊条里坪付図(以上、当館)、絶海中津墨跡(寶島寺)(慈濟院)

書跡

2月10日(火)～3月15日(日)

○華手経卷第十二(五月一日経、大方広十輪経卷第三、○紺紙金字一字宝塔法華経(以上、当館)、○大般若経(中尊寺経)(金剛峯寺)、○涅槃会法式(高山寺)、○涅槃講式(觀音寺)、○涅槃講式、遺跡講式、○豊前国仲津郡丁里戸籍、○越中国防波郡石栗村官施入田図(東大寺開田図)(以上、当館)

【考古】

土偶(山形県杉沢遺跡出土)(当館)、人面付土器(茨城県小野天神遺跡出土)(茨城県立歴史館、銅鐸(妙国寺)、人物線刻装飾付子持壺、装飾付子持壺付器台、○三角縁神獸車馬鏡(奈良県佐味田宝古墳出土)以上、当館)、素弁蓮華文軒丸瓦(奈良県横井魔寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(均正唐草文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、バレット文隅木蓋瓦(和歌山県上野魔寺出土)(以上、当館)

館)、鬼面文軒丸瓦(奈良県地光寺出土)、鬼面文隅木蓋瓦(奈良県貝塚魔寺出土)(以上、橿原考古学研究所附属博物館)、鬼面文鬼瓦(奈良県東大寺出土)(京都国立博物館)、鬼面文鬼瓦(奈良県中山瓦窯出土)(当館)、鬼面文鬼瓦(伝奈良県秋篠寺西塔址出土)(個人)、三彩陶片(奈良県一条高校出土)(当館)、●栗原寺伏鉢(談山神社)、三彩陶片(奈良県一条高校出土)(当館)、三彩陶片(三重県伊勢寺魔寺出土)(個人)、○佐井寺僧道藥墓出土品、○山代忌寸真作墓誌、行基舍利瓶残欠、灰釉平瓶(奈良県壺坂寺奥院出土)(以上、当館)、銅製骨蔵器(奈良県葛城市新庄城山出土)、須恵器骨蔵器(奈良県甘樫丘出土)(以上、個人)、銅製骨蔵器(奈良県火野谷山出土)(橿原考古学研究所附属博物館)、○銅製経筒・滑石製外筒(伝福岡県出土)、○滑石製勒勒如來像(鉢形経塚出土)(以上、当館)、六角宝幢形経筒(六十六部廻国巡礼経筒)(個人)

【工芸】

舍利容器、棺形舍利容器(以上、当館)、金銅製舍利容器(方形六角形、佐波理合子)(個人)、○透彫舍利容器(西大寺)、○三角五輪塔形舍利容器(浄土寺)、○火焰宝珠形舍利容器(海龍王寺)、蓮台形舍利容器(以上、当館)、千手観音鏡像(松竹及鳥文)(個人)、○阿弥陀如來鏡像(松喰鶴鏡)、藏王権現鏡像、千手観音鏡像、男神対向鏡像、孔雀文磬、孔雀文磬(以上、当館)、○草花文磬(峰定寺)、○宝相華文蓮華形磬(赤松院)、○梵鐘、梵鐘(以上、当館)、金銅装束相箱(2月8日)(以上、個人)、○金銅装束相箱(2月8日)(以上、個人)、○金銅装束相箱(2月8日)(以上、個人)、○輪宝羯磨獅子時給成体箱(万徳寺)(2月10日)、○黒漆塗机(高山寺)(2月8日)、黒漆脇机(当館)(2月8日)、須弥壇(2月10日)、礼盤(2月10日)以上、当館)、○金銅密教法具(厳島神社)、金銅独鈷杵(松尾寺)、銅三鈷杵、金銅三鈷杵、金銅五鈷杵、金銅割五鈷杵、白銅五鈷杵、○金銅独鈷鈴、金銅三鈷鈴、金銅宝珠鈴、金剛盤(以上、当館)、○四天王五鈷鈴(弥谷寺)、五鈷種子鈴(当館)、金胎阿闍世三摩耶形花瓶(持

福寺)、金銅一面器(西大寺)、十一面観音懸仏、菩薩懸仏、○山王十社本地懸仏(以上、当館)、阿弥陀如來懸仏(個人)

●国宝 ●重要文化財

すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

かえんほうしゅうがたしやうき
火焰宝珠形舍利容器

奈良・海龍王寺

鎌倉時代 正応三年(二九〇)

重要文化財

精巧な装飾がほどこされた金銅製の蓮華座に水晶製の宝珠を奉安した舍利容器。鎌倉時代の金工技術の高さを示す代表的作品である。宝珠を囲む火焰は四方から立ち上り、蓮弁は一枚一枚に三弁宝珠が刻まれる。蓮華座には敷茄子の中と華盤の下に伏せた獅子が表される造形的な特徴がみられる。

基壇裏には刻銘があり、正応三年(二九〇)七月に海龍王寺の実忍が願主となつて制作されたことがわかる。また鎌倉時代に舍利信仰を広めた西大寺叡尊の伝記『西大勅諭興正菩薩行実年譜』正応三年八月一日の記事に海龍王寺で新たに「金塔」を造り、法華寺の舍利を分けて納めたことが記されており、「金塔」がこの舍利容器にあたるものとみられる。同月二十五日に叡尊は遷化していることから叡尊が造立に関わった最後の舍利容器とも考えられる。従来、台座の獅子について叡尊の文殊信仰に関係するのではないかと解釈されてきたが、舍利容器全体が叡尊の修した金輪仏頂法の道場観におおよそ符合することが指摘されている。

永井洋之(当館研究員)

展示の現場から

「注目の逸品」について

中島 博

(情報サービス室長)

少し旧聞に属しますが、平成十八年八月に、平常展「仏教美術の名品」のうち、本館を会場とする彫刻の展示構成を一新しました。その際に新しい企画として、「注目の逸品」と称し、館蔵品または寄託品の中から選んだ点について、第二室または第三室の一郭に独立した空間を設け、詳細な解説も付して、特に深く掘り下げて鑑賞して頂けるようにしました。以来二年半ほど経ち、もうすっかりおなじみのコーナーになっていると思います。

このたび、その「注目の逸品」の企画を拡大して、絵画・書跡・工芸・考古という彫刻以外の四部門でも行うことになり、昨年十一月末の西新館での平常展再開時から開始しました。場所は、各部門の展示の中ではなく、西新館に入って最初の展示室全体を「注目の逸品」にあて、四部門それぞれが一つのケースを担当して展示しています。

ふだん、平常展の陳列品を選定するときは、仏教美術の各部門ごとに概要が理解できるようにという



十六羅漢像〈跋陀羅尊者〉(当館)



◎大道和尚像(当館)

ことを基本姿勢にし、またその中でも単調に陥らないように、小さい特集展示のようなものを組み込むなどの工夫をします。有名な作品を見たいという要望がよく寄せられることもあって、国宝や重要文化財などの名品をできるだけ多く取り上げるようにもしています。その結果、ほとんど展示の機会がない品も出てきます。あるいは、スペースなどの事情から、その作品の特徴を十分に示す展示がしにくく、そのせいであまり眼を引いてこなかったのではないかと、残念に思っていることもあります。

例えば、館蔵の絵画「大道和尚像」は、画面の横幅が約十七センチメートルという異例の小ささのため、他の祖師像と並べて展示したときには、見栄えしないで終ってしまいかねない、不利な点があります。それが、小さくまた奥行きが浅いケースに一幅だけ掛けられるとき、おそらくきわめて個人的な尊崇の念から描かれたであろうと考えられるこの絵が、そこに込められた親愛の情まで伝わってくるような見え方をするのではないのでしょうか。なお、そのケースの裏側には、やはり館蔵の「十六羅漢像」を配します。もと十六幅一組であったうちの一幅のみが伝わっているため、なかなか展示の機会がありませんが、「大道和尚像」の祖師像としては珍しい図様の源泉を考える際に参考になるのではという意味で、一緒に展示することになりました。

この「注目の逸品」では、どの部門もそのような視点で展示品を選び、ときには部門間の連携も図ります。ゆつたりした空間で、個々の品とじっくり対面し、その魅力を存分に味わっていただけるようにと願っています。



会場風景

●公開講座●

特別陳列「お水取り」関連

2月14日(土) 「修二会 行と祈り」

橋村公英 (東大寺教学執事)

3月7日(土) 「枯草について 一人道不浄相図その他」

中島 博 (当館情報サービス室長)

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて、先着200名(午後1時より講堂入口で入場券を配布し、開場します)。聴講無料。

●サンデー・トーク●

1月18日(日) 「興福寺大乘院主・尋尊ゆかりの舍利容器」

清水 健 (当館研究員)

2月15日(日) 「大道和尚像」

中島 博 (当館情報サービス室長)

3月15日(日) 「とてもよく似た二つの仏像

一金峯山寺の釈迦如来像と兵庫県所蔵の天部像」

鈴木喜博 (当館上席研究員)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。先着200名(午後1時30分より開場)。聴講無料。

◆奈良国立博物館賛助会

2009年1月1日現在、一般会員(個人)25名、一般会員(団体)17団体、特別会員1団体、特別支援会員6団体のご入会をいただいております。

このたび、次の方に新たにご入会いただきました。改めてお礼申し上げます。

【一般会員(個人)】 古屋 光夫 様

【一般会員(団体)】

校倉な会 様、株式会社 南都銀行 様、小山株式会社 様

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円(共催展の場合は別途定めるものとします)で観覧できます。(学生証および引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。)

【会員大学等(2009年1月1日現在)】

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、畿央大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、近畿大学文芸学部、実践女子大学文学部、就実大学人文科学部、種智院大学、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学、奈良文化高等学校、奈良学園高等学校、奈良文化女子短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

じゅう に しんしやうりゆうぞう 十二神将立像

木造・彩色 像高99.0～110.7cm
平安時代(11～12世紀)
重要文化財
東大寺

東大寺本坊中庭の天王殿に伝来した群像。

12軀のうち、子と丑、寅と卯というように、順番に2軀ずつの組み合わせをつくり、それぞれが内側を向き合う構成をとる。甲冑や衣服の形式、あるいは頭髪のかたちなどが少しずつ異なり、群像としての変化を設ける意図がうかがわれる。

頭上に戴く十二支獣

の多くが造像当初のもので、本来、別の存在であった十二神将と十二支とが結合した作例として、早い時期のものといえる。寅神や卯神像等の腹部に、獅噛に代えて十二支獣が表されていることも注目にあたいする。また当初の彩色や截金文様が比較的良好な点も貴重。

作風から12軀を幾つかのグループに分類することができ、複数の仏師による分業制作の実態が想像できる。京都・広隆寺、兵庫・東山寺の十二神将像との比較により、11世紀末から12世紀初頃の制作と推定される。

岩田茂樹
(学芸部長補佐)



申神



丑神

平常展の みどころ

ろっ かく ほう どう が たきょう づつ 六角宝幢形経筒

銅板打ち出し・ツメ折留め・鍍金
〔中央・右〕永禄二年(1559)・〔左〕弘治三年(1557)
総高13.8～15.9cm
個人蔵



六角形の筒身に笠蓋をかぶせた小さな経筒たち。その大きさは5寸足らず。当初は全体が鍍金で輝き、軒先にはガラス玉を連ねた璽瑠が下がるきらびやかな姿であった。筒身正面には小さな釈迦如来像を鑿で打ち出し、中には法華経八巻をきつく巻き絞めて納めていた。宝幢とはホトケの教えが説かれる場所に立てられた飾り幡のこと。パラソルのような天蓋から、六角ないし八角の筒状の幢身を吊す。平安時代の経筒や鎌倉時代の石造物にこれを意匠化したものが存在するが、その数は決して多くない。この宝幢形が突如、戦国時代に復活し、装いを新たに量産されたのである。「六十六部」と呼ばれる廻国巡礼の聖たちは、この経筒をたくさん携え、全国各地の霊場や寺院に一つずつ奉納したのである。こんなに小さく作ったのは、彼らの背負うツツラに収納するため。現在残っているのは40点余り。今回はその内の11点をまとめて初公開している。展示品には紀州(和歌山県)や与州(愛媛県)、美濃(長野・岐阜県)、上野国(群馬県)などからやってきた聖の名前が見える。年号を「當年今日」とぼかして刻んでいるのは、巡礼の旅が長い歳月にわたる覚悟を表している。苦難に満ちた聖たちの旅路を、その背中から見ていた可愛らしい経筒。聖にとっては愛娘のような存在だったに違いない。

吉澤 悟(教育室長)

開館予定(1月～3月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時
※1月24日(土)・2月3日(火)・3月12日(木)は午後7時まで

■休館日

月曜日(祝日の場合はその翌日)、1月1日(祝)
※3月2日・9日は、月曜日ですが開館します。

観覧料金

平常展・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	
団体	400円	200円	無料

*団体は責任者が引率する20名以上

*中学生以下、70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料です



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

*当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

「奈良国立博物館だより」は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。